

子どもの会話（その一）

無藤 隆

幼児は回りの人々どのようなやり取りをしているのだろうか。子どもは人とのやり取りの中からいろいろなことを学び、発達していく。だから、他の人とのやり取りを分析することは、子どもの発達を考える上で多くの示唆を与えてくれるに違いない。

幼稚園での教育を考える上でも、子どものやり取りに注目することは大事なことだ。教育の一つの核は、子どもにとっての回りの人々である先生や子どもが働きかけることだからである。大人である我々は、教育的営みである子どもへの働きかけを反省するために、自らがしている子どもとの会話を再検討してみてもよからう。

本稿では、具体的な会話の例を挙げて、考察していきたい。それが分かりやすいし、実態に迫ることもなると思うと共に、やり取りの場での動きを離れて真実などはないと思うからである。具体的な例をどこまで分析できるか我々の学問の勝負所だと思ふのである。読者の方々もその分析に参加して、私の分析がどこまで納得がいくか、別な分析の可能性はないかどうか考えていただ

ければと願う。私が常日頃学生に言っているように、ある日、ある時、ある子どもが行った会話の断片を、シェイクスピアの作品のように豊かなものとして検討する・出来ることが理想なのである。

ここで、やり取りと言ひ、会話と言っているが、それは要するに、人と人とのやりとりを「意味」の構築の過程と見て、その細かい動き―言葉も身振りも状況も含めて―から成り立つものを指している。言葉は極めて大事な役を果しているが、決してそれが全てではなく、その場に存在するもの、存在しなくても影響している全てのものを含んでいることに注意して欲しい。以下の例を挙げるときは、主に発話を示すが、これは多分に表記上の便宜的な理由による。研究としては、観察者

である我々が会話を理解する上で、どのような知識が必要なのか、その知識を一般的な会話の枠組みとして整理することが眼目となる。

なお、これから挙げていく会話例は、全て私の研究室で組織的に収集してきたものである。家庭や幼稚園でビ



デオにより撮影し、その発話や主な身振り、状況を文字に直し、一定の観点で分析、考察している。観察特にビデオ観察の利点や限界については、別稿を参照して欲しい。(無藤他編著「子ども時代を豊かに」学文社。)

一 母と子の会話

まず、母と子のやり取りを見てみたい。母とのやり取りが子どもの成長にとって重要であることは言うまでもないが、さらに、幼児の教育にとってのいろいろな示唆もここから得られる。母親は子どもに対して、必ずしも意識はしていないにしても、微妙な形で発達を助け、教えているのである。

母と子は様々な会話を互いに交わしている。一つの会話を取っても、そこには多くの側面がある。以下に取り上げるものは、そのごく一部に過ぎないが、母子の会話の豊かさと子どもの発達にとって持つ意義深さはかいま見られるに違いない。

例一 二歳の子どもとその母との会話

母1 はい、どうぞ。(茶碗を渡す。)

子1 (茶碗を受け取り、食べる真似。)

母2 おいしい？

子2 (茶碗を差し出す。) はい。

母3 (茶碗を受け取る。)

おいしかった？

かずみちゃん、おいしかった？

(中略)

母4 (茶碗に何かをよそう真似。)

おかわりどうぞ。(茶碗を差し出す。)

子3 はい。(茶碗を受け取り、食べる真似。)

母5 ご飯、おいしい？

子4 (茶碗を差し出す。) はい。

母6 うん。(茶碗を受け取る。)

(中略)

母7 ちょっと待っててください。

(フライパンで何かを作り、茶碗に入れる真似を)

して、差し出す。)

はーい。おかわり。

子5 はーい。(茶碗を受け取る。)

この例では、母と子が一緒にままごと遊びをしている。母1から母3まででご飯を食べている。母4から母6までではおかわりをしている。母7と子5とでフライパンで作ったものを食べることに変わっている。

ところが、よく見ると、子どものしていることは、茶碗を受け取り、食べる真似をし、また渡すという定型の繰り返しである。母が、ご飯、おかわり、おいしい、おかず等の流れを与え、膨らましている。

例二 四歳と二歳とその母の会話

〔場面1〕

姉1 ちいちゃん(自分のこと)、ごはーん。

(茶碗を母に差し出す。)

母1 (妹を膝の上に乗せている。)

(妹の手を取って、姉から茶碗を受け取り、ご飯をよそう真似をする。)

はーい、今ご飯、上げますよーって。

妹1 んーよ。

姉2 早くご飯ください。

(箸で皿を叩く。)

母2 (姉に茶碗を渡す。)

はい、どうぞって。

ここで、母親は姉と妹の間に立って、ままごと遊びを展開している。母1、母2の発話のいずれも妹の代わりに発言しているもので、同時に、妹にままごとでのある言い方を教えてもいる。その教え方は、ままごとを現実に進める中で、発話の内容に見合った身振りをしながらである。妹は「んーよ」と、「上げますよ」を真似しており、親の手本を取り入れつつある。姉の方は、ままごとの中に明瞭に役を持って参加しており、ご飯をもらうのに、母に習って「下さい」という言い方に直してい

る。

「場面2」(場面1の続き)

妹1 (茶碗をつついている。)

母1 かずみちゃん(妹のこと)、何作っているの？

姉1 かずみちゃん……かずみちゃん……かずみちゃん

はパーパ！

母2 パパ？

姉2 うん。

母3 ちいちゃんは？

姉3 ちいちゃんはお母さん。

母4 ちいちゃんはお母さん？

姉4 うん。ママは……ママは……ママは、ママのお母

さん！

母は、妹の動作を見て、ままごとの中の動作として解釈を与えようとする。それは成功しないが、姉が、妹を父親役に見立て、ままごとに組み込む。おそらく妹は了

解していないが。母は、姉にその役を問うことで展開を

計る。姉は、妹に役を振る前からそのつもりだったかもしれないが、あるいは、母の問いに促されて、自らを母親の役とする。そこで、母に、改めて繰り返されることで、おそらく、現実の母親(「ママ」)の存在と矛盾を感じたのではないか。このままでは、母親が二人いることになってしまう。ここで、空想と現実とが混同されている。しかし、少しためらった後に、姉は、母に祖母の役を振ることで解決する。これは多分、現実の人間関係(母とその母つまり祖母)によっている。

続いて、

「場面3」

姉1 はい、パーパ。お茶ですよ。どうぞ。

(妹に茶碗を渡す。)

妹1 (姉を見て笑う。)

母1 うわっ、いいな。ママもお茶欲しいなー。

姉2 はい。待っててくださいーい。

(急須からお茶を注ぐ真似をして、母に渡す。)

母2 (飲む真似。) うわー、おいしいな。

ね、かずみちゃん、おいしいね。

姉は早速、妹にごっこをする。妹は分かっているかどうか、ともかく笑う。母は妹がお茶をもらって喜んでいると解釈を与え、共感を表し、ごっこの中で欲しがる。お茶を注いでもらい、母はさらに、表情豊かに、妹を巻き込む。

【まとめ】

親は、小さい子どもと様々な会話をして楽しんでいる。子どももまた、親との会話を楽しんでいる。まずは、一緒に何かをし、共有すること、意志が通じていると感じられることが大事なのである。そのために、親は、子どもが出来る所はやらせ、出来そうもない所はどんどんやってやり、しかし、子どもがやっているかのようにはしばしば振舞う。まるで、親は、子どものいる二次

元の世界を三次元の世界に拡大しているようだ。その三次元の世界には、子どもの意図、気持ち、空想の役柄や演技が含まれている。親は、子どもの発達の拡大者としての役を結果的に果しているのである。

(お茶の水女子大)